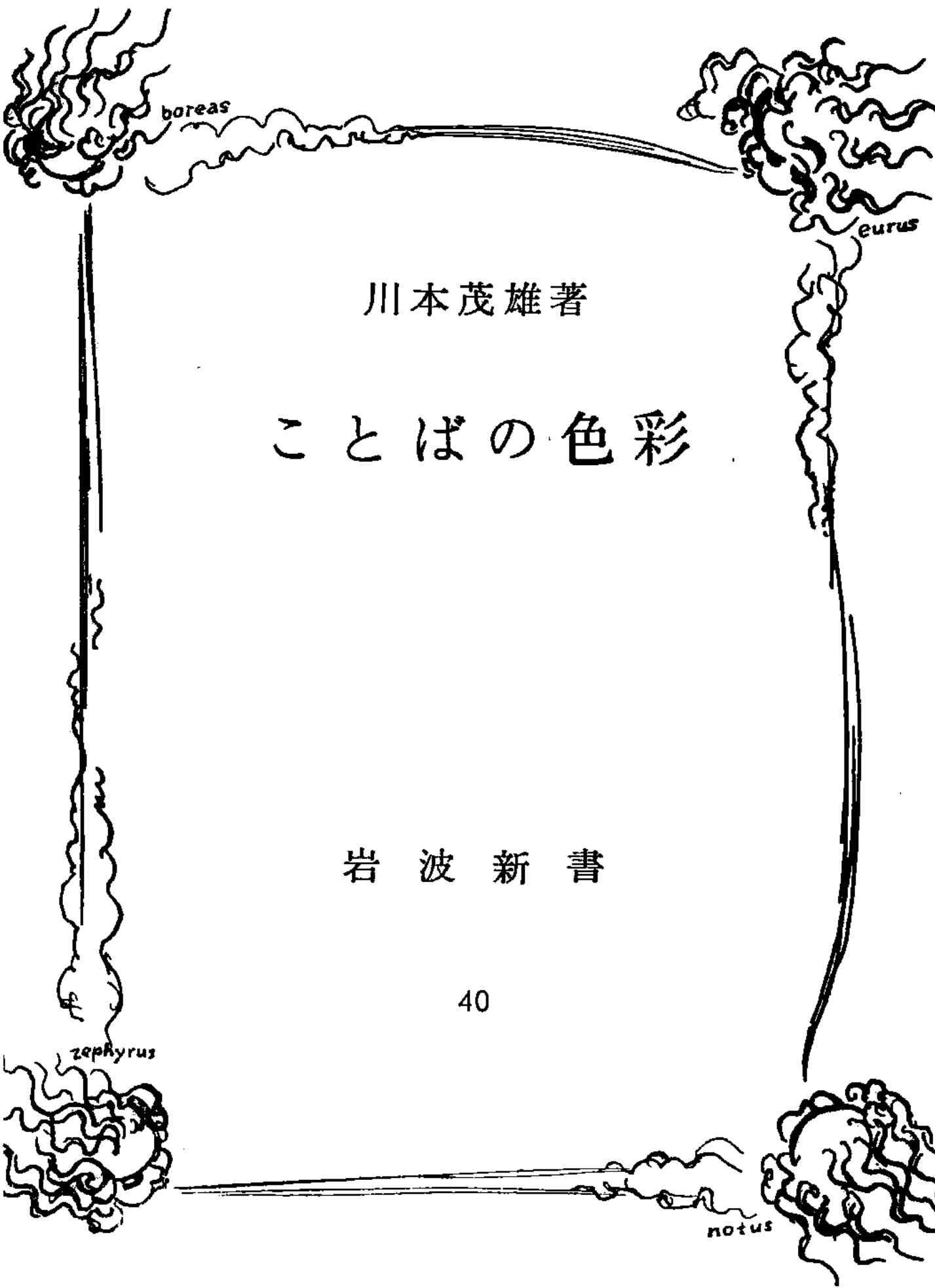


川本茂雄著

ことばの色彩



岩波新書



川本茂雄著

ことばの色彩

岩波新書

40

川本茂雄

1913年東京に生まれる

1937年早稲田大学文学部卒業

専攻—フランス語学，一般言語学

現在—早稲田大学教授

著書—「ことばとところ」(岩波新書)

「言語学概説」

「コンサイス仏和辞典」(共著)

「講談社英和辞典」(編集主幹)

訳書—「中世歌物語オーカッサンとニコレット」

ヤーコブソン「一般言語学」

チョムスキー「デカルト派言語学」

「知識と自由」

「言語と精神」

ことばの色彩

岩波新書(黄版) 40

1978年3月20日 第1刷発行 ©

¥ 280

著 者 かわもと 川 本 しげお 茂 雄

発行者 岩 波 雄 二 郎

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店 会社

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

I
ことばのあそび
.....

ことばあそびという窓(三)

パロディの形(二七)

問いと答え(三)

II 表現と理解……………三九

詩學もどき(四〇)

「小航海時代」の構造(四九)

以言伝心(五)

紅茶・珈琲・可口可樂(ㄉㄛ)

「日本人を意識する」(七三)

「てにをは」のこと(七)

規則の侵犯(八七)

法とことば(二〇〇)

III 日本語の文法……………二五

一 情報内容と表現量(二六)

二 文脈への依存(二九)

三 論理関係の表示・暗示(三九)

四 むすび(五二)

IV 文法のメカニズム……………一五

文の生成(二六)

文法知りの文法知らず(二七)

規則は有限、文は無限(二九)

あとがき……………二二

I

ことばのあそび

ことばあそびという窓

『ことばあそびうた』（谷川俊太郎詩、瀬川康男絵、福音館書店刊）という小冊が、わたくしの前にある。表紙は六つの齣こまに仕切られていて、その一つに書名が「ことばあそ／びうた」と二行に赤い字で綴られている。残りの五齣には、サル、タヌキ、ネコ、カップ、キツネがそれぞれ黒い線で描かれ、赤と黄と緑で彩られている。裏表紙も似たようなデザインになっている。『日本傑作絵本シリーズ 3才から』と刷りこまれている。

さる

さるさらう

さるさらさらう

さるさるさらう

さるささらさろう

さるささらさろう

さらざるささらさらさらって

さるさりさる

さるさらば

表題は「さる」。その「さる」が、おのずから全篇を決定してしまっている。八行のうち一行だけを除いて、どの行も「さる」で始まる。

そればかりではない。冒頭の行の音の構造を見てみよう。s-a-r-u s-a-r-u-aとある。基礎は「さる」の繰り返しといってよい。ただ、二度目のときには、母音のaがヒョンと重ねられて、語が伸びている。（さるが手を伸ばしてさらう。）音のたわむれによって、「さる」という名詞と、それから出てきた「さらう」という動詞が、主語と述語として対立する。

「さらう」は他動詞だ。だから目的語の名詞が現われて当然。「さらう」の頭が繰り返されて「さら／さらう」となる。

「さら」が出てきて、主語の「さる」と対立する。対立の契機はs-a-r-uとs-a-r-u-aとの

ε・αの母音。そういえば、一行目にも二行目にも、母音はuとaしかない。いや、三行目にも四行目にも五行目にも、uとaしかない。つまり五行全体がs-a-r-r-u s-a-r-r-a-uのレベティションとヴァリエーションというわけだ。

三行目は、二行目に反対して、目的語が主語に近づく。けれど同じにはならず、sとzと、無声の歯擦音と有声の歯擦音の対立となる。一行目から三行目まで、今度は子音を調べると、歯擦音と流音のrだけから成っている。四行目も五行目も、やっぱりそうだ。

だから、この詩の初めの五行は「さる」の変奏曲だ。（「さる」が跳びまわっている。）

四行目では、目的語が二行目の「さら」から「ささら」へと延びる。それが、五行目では配列が変って「さらさ」となる。前の目的語は「さら」、「さる」で、両方ともに丸い形の台所用品だが、「ささら」、「さらさ」になれば、もう意味の関連はどうでもよくなって、音の流れが軽快に走る。初行がε+αの五音節、二行目と三行目がε+ε+αの七音節、四行目と五行目はε+α+αと八音節。初行の形ε+αが、二行目と三行目では末尾に、四行目と五行目では冒頭に、再現されている。

もちろん、ことばだから、この歌にも意味はある。文法もある。けれども、こうして見れば、このことばあそびの歌が音のあそびであることが、はつきりする。いや、こんなに手間

ひまをかけなくたって、はじめて口にしたときから、そのことは子どもにだって明らかなのだ。ただ、おとなには分析という余計な癖がある。

ところで、残りの三行はどうだ。

まず、「さらざるささらさらさらって」と、いままで出てきた目的語を全部その順序のままに繰り返して総まとめする。「さ」と「ら」の追いかけてっこ。そして、行末はいままでの「さらう」が「さらって」と、はじめて促音が、歌のなかの唯一つの促音が現われ、母音 e が一回だけ出ている。音節(モーラ)の数も、総まとめの行だけに長いけれども、 $\sim + \sim + \omega$ の七と、 $\sim + \sim + \sim$ の七と、逆立ちしながら(つまり、両端に 2 を控えて、内部で 2 と 3 がデングリ返って)、二行目と三行目、四行目と五行目を^{ほうふつ}髣髴させる。そして、「さらって」の連用形が次の行へ橋渡しする。

六行目は「さる」で始まっていない唯一つの行だが、七行目はこれを補うかのように、「さる」で始まり「さる」で終る。そして最初の「さる」が名詞、後の「さる」が動詞と分化している。中間に「さらり」と擬態語が一つ、——それは全部 r の流音でできていて、意味にふさわしい音の姿を示している。「り」には、この詩でたった一度だけ母音 i が現われている。ここは七音節の一行をなし、冒頭の二行目と音節数が同じであり、次の五音節の最終行

といっしょに、うたのはじまりの鏡像をつくる。

こうして最後の「さるさらば」の五音節が、最初の「さるさらう」に対応する。ここでも「ば」の子音bは、詩中唯一つの有声破裂音である。二行前には、唯一つの無声破裂音があった。「さらば」は、いわばサルの別れのことば、逃亡のジェスチャー。ここには「直接話法」、そして前の行には「さらり」という擬態語。

こうしてわかることは、最後の三行は変化を主調としながらも歌全体の範型を保ち、最初の五行は範型を貫き通して、そのあいだに変化が散布されている、ということだ。はじめは主に音が響き、おしまいは音から意味があふれ出て、サルがするりとさらばする姿が浮かぶ。こうした音のたわむれは、谷川俊太郎のおとなの詩にも現われる。

煙草はLMそれともサレムそれともキャメル (「GO」)

サクスのセクスの中 泡出つ唾液のサクセス (「マリファナ」)

「GO」も「マリファナ」も、詩集『21』の〈今日のアドリブ〉の部分に属することに注目

しておこう。この三部から成る詩集『21』の（今日のアドリブ）の部分は、北川透氏によると、「ことばやイメージの連想作用をもとにおいたオートマチズム（広義の）への志向」が認められるものである。音を前面に押し立てて、意味を薄めてしまえば、スキヤットになる。

俺はミスタジャジージャズー ジャザールの広場でジャソーに乗ってジャゼツパ歌いながらジャズリングをジャズウジャベツてるジャツプのバツプ ジャザイはしないジャザイカの胸毛さ ジャズイはやめてくれ ジャゼージョンのジャジイズはジャザズウのジャジ ジャズってるジャジャンザはジャズトジャザイズのジャジャジャズムなのさ（「スキヤットまで」）

もう一度、『ことばあそびうた』へ立ち戻ろう。

すり

すりはする

なにをする

するりする

うりをする

すりはする

なにをする

すりもする

つりをする

すりはする

なにをする

つるりする

あたまする

ここでも、表題の「すり」が、その音形で歌の全体を支配する。冒頭の「すりはする」で、

s-u-r-i と s-u-r-u のなかの母音 i と u の対立が基調と変奏をつくる。文法的には前者が名詞、後者が動詞、二つがここでも主語と述語として相対している。だが、この場合注意すべきことが二つある。「する」が「^す掬摸る」であるとして、「^す掬摸」の「すり」は、動詞に由来する派生名詞であることが、その一つ。つまり、この場合は音形に些少の差異があり、文法的に品詞の相違があっても、意味論的なつながりが残っているということ。も一つの注意すべき点は、同じ音形の「する」ではあっても、そこには「^す掬摸る」、「^す為る」、「^す剃る」と、意味論的には別箇の三つの動詞が隠れていることである。今度は、音形も文法上の範疇も同じであるけれども、意味論的な違いがある。「すり^すはする／なにを^すする」と同じ問が三度繰り返されてはいるものの、また、三度ともに「する」の動詞で応じられるものの、三つの答がそれぞれに別なのだ。

ここで、詩集『落首九十九』の「さばく」という詩を参照しよう。表題の「さばく」は「^す裁く」(その関連語「^す捌く」という動詞らしく、それが「さばき」という連用形で何度も繰り返される。だが、一行孤立する最終行の末尾の「さばく」で、たちまち「砂漠」に変わる。そして、その s-a-b-a-k-u が s-a-k-u-b-a-k-u と「く」の繰り返しによって成る修飾を伴なう。

さばく

十二月

交通巡査は

車の流れをさばききれない

さばき髪のかみさんは

売れ残りをさばききれない

感傷的な陪審員は

感傷的な子殺しをさばききれない

二十世紀の文明は

わずか半世紀前の罪をさばききれない

乱世であろがなかりうが

人間は人間をさばききれない

さくばくたるさばく！

もう一度『ことばあそびうた』に立ち帰る。「ことこ」という表題の歌がある。「ことこ」では、ちよつとなんのことか見当がつかかねるが、*ko ko ko*と母音*o*の繰り返しはおもしろいし、二つの*k*が*t*を挟んでいるのもおもしろく、音のたのしみがある。音声学的には、*k*も*t*も無声の破裂音、そして*k*は口腔の奥のほうで発音され、*p*がこれに相對して口腔の前のほうで発音される無声破裂音だが、それらの中途で出るのが*t*だ。

ことこ

このこのこのこ

どこのこのこ

このこのこのこ

たけのこきれぬ

そのこのそのそ

そこのけそのこ

そのこのそのおの

きのこもきれぬ

ここでは、各連の最後の行を除けば、すべての音節が、表題に似て、oの母音で統一されている（ただし、一カ所だけ母音がeになって「け」が用いられている）。oの母音に主としてkとsとnとが配され、一カ所でd、もう一カ所ではゼロの子音（母音だけ）が割り当てられている。音の配分による調子がすこぶるいい。いや、調子があんまりいいので、どのように切れ目をつくって単語を析出し、意味をすくい取っていいかに、とまどうほどである。第一行の「このこのこのこ」はとくにそうだ。第二連の対応の行、「そのこのそのそ」まで調子に乗って読んできて、「その子、ノソノソ」がはっきりつかめ、その上で引き返して、同じリズム、同じ文法構成を適用して、「この子、ノコノコ」がよくわかるようになるほどである。同時に「その子のその斧」と「この子のこの鋸」の意味も透明になる。「そこ退け、その子」と「どこの子、この子」にも、幾分かは同じようなところがないわけでない。